

関学生が開発途上国での ボランティア体験を語る

～西宮上ヶ原キャンパス・東京の国連大学で開催～

関西学院大学の国際ボランティアプログラムに参加し、開発途上国を中心とした各国でのボランティア活動に従事した学生の帰国報告会を下記のとおり開催する。

関西学院大学では、2004年から日本で初めて国連ボランティア計画(UNV)と協定を結び、学生をボランティアとして開発途上国へ派遣する国連ユースボランティアを実施するなど、複数の国際ボランティアプログラムを実施してきた。

数あるプログラムのなかでも、関学大が始めた国連ユースボランティアは、2013年度より関東の5大学とも連携した取り組みに発展。関学大が基幹校となり、2014年度は6大学から約12名の学生を12カ国へ派遣した。このような国連と大学が連携したボランティア派遣の枠組みは世界でも珍しく、国連の国際会議などでも高い評価を受けている。

帰国報告会は西宮上ヶ原キャンパスの他、東京の国連大学でも実施する。東京で実施する国連ユースボランティアの帰国報告会では、学生の報告やパネルディスカッション、UNV事務局長による基調講演を実施する。

【国際社会貢献活動帰国報告会】

■日時:3月16日(月)10時～16時

■場所:西宮上ヶ原キャンパス G号館 326号教室

■内容:タイ、マレーシア、ラオス、カンボジア、インドネシア、スリランカ、オーストラリア、ドイツに派遣された学生14人による帰国報告会。赤十字国際委員会(ICRC)、JICA青年海外協力隊、国際NGO等における各自の活動を報告する。

【国連ユースボランティア帰国報告会】

■日時:3月19日(金)14時～17時

■場所:国連大学「エリザベス・ローズ国際会議場」(東京都渋谷区神宮前5-53-70)

■主催:国連ボランティア計画、関西学院大学、上智大学、明治大学、明治学院大学、立教大学、東洋大学

■内容: 国連ボランティア計画 事務局長リチャード・ディクタス氏による基調講演と、ルワンダ、モザンビーク、ガーナ、サモアなどの開発途上国に派遣された国連ユースボランティア参加学生12人らによるパネル討論等

■問い合わせ: 関西学院大学「国連ユースボランティア」派遣日本訓練センター(0798・54・6115)

「いのちとは何か」を 探求し卒業へ！

～配偶者の死を乗り越えて～



中高時代に両親が相次いでがんに侵されたのをきっかけに看護師をめざした安井優子さん(人間福祉・4年)。救急医療を経て緩和ケアの看護師となり、そこで出会って結婚したホスピス医の夫をがんで看取った。

いのちとは何なのか。人生の意味とは何なのか。答えを見出そうと40歳を目前に関学大に入学。看護師を休業して、

QOL(クオリティ・オブ・ライフ)やスピリチュアリティを研究する藤井美和教授のもとで4年間学んだ。

卒業論文は『死別による悲嘆からの再生—成人前期(30～40代)で配偶者と死別した人に焦点を当てて—』。若くして配偶者をなくしつつも前向きに生きて歩もうとする7名にインタビューし、死別後の人生の意味付けを分析した。彼らを前向きにさせるものは何なのか。

彼らが死別を肯定的に捉えているという仮説は立証できなかったが、「故人はいつも私を見守ってくれている」と故人とのつながりを継続していることは立証できた。また、神や宇宙といった人間を超えるものとの関係性から、生きる意味を追求しようとしていることを論証した。

「誰にもいつか必ず死はやってきます。『死』を含めて『生きる』ことを考えることは、人生の壁にぶつかったときにきつと活かされます」と話す。安井さんは関学大大学院に進み、「将来はいのちや死について若者に伝えていきたい」と抱負を語っている。

関学中学部から女子生徒が初の卒業

125年の歴史を重ねた関西学院中学部は、2012年4月に初の女子生徒を受け入れて共学化した。この度、94名の女子生徒を含む236名が晴れやかに卒業式を迎える。

228名(女子90名)の生徒は、関西学院高等部に進学予定だ。

■日時:3月14日(土)9時～

■場所:西宮上ヶ原キャンパス高中部礼拝堂



次号は3月16日(月)発行予定